

中国八達嶺周辺の養蜂

宅野 幸徳

2002年7月下旬に所用にて中国北京に数日間滞在した。2002年7月27日午前北京市内からマイクロバスで万里の長城に向かった。筆者は、途中の八達嶺近くの道沿いにミツバチの巣箱がいくつも置かれてあるのを見つけたため、マイクロバスを止めてもらい養蜂を見学した。養蜂家からミツバチについての聞き書きを取り、養蜂状況の写真を撮影することができたので、ここで紹介することにする。

中国の養蜂

養蜂家の胡勝来さん(49歳)は、安徽省黄山市出身で北京の八達嶺には数日前から来ている。胡さんは転地養蜂を行っており、1年間の移動は、27から28か所でありトラックや船で移動する。北京市内では3か所ミツバチの巣箱を置く場所があるようである。巣箱は日本で使用しているセイヨウミツバチの巣箱と同じ形態で、ひと箱のものと二段重ね式のものがある(図1)。

胡さんは、農牧漁業部の許可を得ており『養蜂管理暫行規定』と表書きされている手のひら代の赤い手帳を持っており、この手帳が、養蜂する上では必要であると見せてくれた。この手帳を所持していれば、この観光地である八達嶺の場所でも養蜂可能である。また、養蜂家がトラックなどで移動中に交通事故で渋滞の状況に遭遇した時も、ミツバチは生き物であり、いち早く優先して進めてくれるようである。以上から、中国にとって、蜜はとても、貴重なものであるといえる。胡さん家族は蜜源を求めて移動をおこなっており、奥さんと娘夫婦、夏休みということで子供たちも二人加わりミツバチの飼



図1 養蜂場・八達嶺にて

育の手伝いを行っている。胡さんは、この八達嶺では2か所に分けて巣箱を置いており、一方は娘夫婦、もう一方は胡さんの仮小屋を設けている。仮小屋は、胡さん家族が休息や寝泊りをするのに使われる。仮小屋の中には寝台があり、さらに小屋の中には小型の遠心分離機が置かれており、そこで遠心分離機によって蜜の採蜜を行うようである。

現在、飼育しているミツバチは、養蜂家によればヨーロッパとアメリカの雑種であるという。これについては、後述するが、セイヨウミツバチである。著者はミツバチの飼育状況を写真に撮りたいと巣箱に近付いたが、日本でのセイヨウミツバチのことが頭にあり、巣箱に近づけばミツバチに刺されることも考えられ、ややちゅうちょしたが(これについては、帰国後に玉川大学ミツバチ科学研究所施設の吉田忠晴先生に、そのことをお話ししたら日本のセイヨウミツバチも近付いても大丈夫だと指摘をうけた。著者の認識不足であったといえる。)養蜂家は、近付いても大丈夫だと誘導してくれた。巣箱の中の様子を写真に撮った。

玉川大学ミツバチ科学研究所施設の吉田忠晴先生に中国の養蜂についての文献資料はないか問い合わせたところ、『セイヨウミツバチと中国の養蜂 Xu, Z. D. and Y. H. Xie』(ミツバチ科学15巻1号, 1994)が比較的新しい内容であるということで、参考までに送っていただいた。その中には中国の近代養蜂の導入について述べられており、それによれば、近代養蜂は、1912年に安徽省合肥市にアメリカから5群の

セイヨウミツバチを持ち帰り、飼育したとある。また、1913年には福建省、河北省新城郡、江蘇省が日本から数群のミツバチを購入して導入したとある。これが中国におけるセイヨウミツバチの始まりとされている。

今回、出会った養蜂家は、安徽省出身であり、セイヨウミツバチが中国で導入された地域でもあり、約90年前に導入されたセイヨウミツバチの飼育方法を行う養蜂家に万里の長城付近で著者が出会ったのである。

蜜源植物

中国の蜜源植物はたくさんあるが、今回八達嶺付近で出会った養蜂家の蜜源が何か、胡さんに問いかけると、この八達嶺でのミツバチが採蜜する花は、「紫荆花（シジンホウ）」であると答えてくれた。養蜂家は、巣箱を置いているこの場所の近くの山肌には咲いている花を示して教えてくれたが、その花は万里の長城周辺にもたくさん群生して咲いているのが見られた。尚、帰国後、写真の花の名称が紫荆花かどうか、いろいろな機関に問い合わせたが、断定できなかった。今後の調査ではっきりさせたい。

ローヤルゼリー

養蜂家胡さんは、ローヤルゼリーを採取する巣箱を見せてくれた。巣箱の中には、ローヤルゼリー採取用のプラスチック製の人工王椀をつけた木枠が入っており、ここからローヤルゼリーを取るのだと教えてくれた（図2）。胡さんは、ローヤルゼリーは、癌にも効くし、滋養強壮剤にもなり、とても貴重なものであると解説した。帰り際に胡さんからローヤルゼリーを購入した。

まとめ

今回は、中国の養蜂家から短時間ではあったが、セイヨウミツバチについて聞く事ができた。また、写真も撮ることができた。しかしながら、残念ながら、十分な時間をとることができなかったことと、筆者が中国語を話すことができないため通訳者を通してのものであり、中



図2 ローヤルゼリー採取用人工王椀

国の養蜂技術を充分に知ることができなかった。

中国の養蜂家が転地養蜂を行っており、日本のセイヨウミツバチ養蜂と同じ方法をとっていることを知り得た。また、万里の長城を見学後の岐路の途中で、道添いの何か所かに、巣箱と仮小屋と蜜蜂の看板が置かれてあるのを見かけた。万里の長城の八達嶺付近では、この7月の時期に蜜源植物が豊富にあるため何人かの養蜂家が巣箱を置き養蜂を行うのが見受けられた。

今回は中国の養蜂について詳細な報告はできなかったが、今後は、中国における詳細なセイヨウミツバチの養蜂についてとトウヨウミツバチの飼育方法についても知りたいと思っている。

謝辞

中国の養蜂について、以前から興味を持っていたが、今回養蜂家と直接に話ができて、写真を撮ることができたことはとても感動であった。著者のミツバチに関する数々の難解な質問を通訳いただいた日中青年旅行社の劉旭さんにはこの場をかりて御礼を申し上げたい。また、中国の養蜂についての文献をお送り戴いた玉川大学ミツバチ科学研究施設の吉田忠晴先生には感謝申し上げたい。

(〒695-8502 島根県江津市渡津町 1904-1

江の川高等学校)